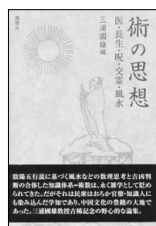


歴史的 research が織りなす「術」のパノラマ

辛 賢

三浦國雄編
術の思想

—— 医・長生・呪・交霊・風水



四六判 344頁
風響社
[本体 2700円+税]

一
本書書名の「術」という言葉には戸惑いを覚える読者もおられるかもしれない。忍術・魔術・妖術に、火遁の術・水遁の術。人知をこえる不思議なわざおぎ。

現在の私たちの日常において、もし「術を使う」人物がいたとすると、その人自体をうさんくさい怪しげな人物として見てしまうと、今日、日常的了解としては、「術」ということばにはそういった怪しげでネガティブな雰囲気がからみついている。

さて、本書『術の思想——医・長生・呪・交霊・風水』は、そうした人知を越える「術」の諸相を、そもそもの原点をめぐって論ずる論文集である。

中国学術史には、「術数」と分類されるジャンルの学問領

域があった。この領域には、呪術以外には理解しようのないさまざまな「術」の技法（それはときに呪術信仰に塗りたくられていることもある）から、今日から見ても非常に合理的であると考えられる数「術」まで、まるでぐつた煮の鍋のように、さまざま多様な問題がふくまれている。

本書はそうした多面的相貌をそなえる「術数」の世界を、正面から取りあげて探求を進め、そこから浮かびあがってくる思想的特徴を明らかにしようと試みる研究書である。

また本書は、編者三浦國雄先生の古稀を記念して企画されたもので、三浦門下生が二十余年もの長い間、先生のもとで『雲笈七籤』（全道教經典のダイジェスト版）の会読を続けてきた成果である。本書の計九本の論考は、各自がその間に積みあげてきた研究の成果であるといえるだろう。

そして怪しげでネガティブな雰囲気がからみついている「術」という概念については、編者が総説においてあらためて分析的に、かつ定義的に詳述している。それによると、本書に取りあげられる「術」とは、『漢書』芸文志の「数術略」（星占書・暦・算術書・五行占書・龜卜占書・夢占書・家人相書など）以降、清朝の『四庫全書総目提要』の「術数類」（象数学・雲氣占・風水・龜卜・易占・四柱推命・人相・手相・陰陽五行占・夢占・文字占など）に至るまでの伝統的な術数にくわえ、長生術や交霊術といった呪術をも視野に入れた、ゆるやかな見地に立った「術」観によるものとしている。

本書に収録される九本の論考は、道教經典・敦煌文書をはじめ、仏教・民俗・人類学にまたがる様々な文献資料を操作し、精緻な分析をおこなうことを基盤にすえつつ、歴史的研究というフィルターを通じ、人間の精神世界を浮かびあがらせようとするものである。そしてその研究の成果は、「あとがき」にも触れているように、中国を中心とした東アジアの宗教・思想が高踏的な「道」（哲学・倫理学）、計量的な「技」（実学）、そして「術」（占術・呪術）という重層的構造を形成していることを明確にしたのだが、さらにそれにとどまらず、もっといえば、高踏的「道」や計量的「技」の水源が、むしろ計量思考ではとらえがたい「術」にこそある可能性をもほのめか

すに至っている。

近代以降、怪しげでネガティブな雰囲気がからみつく通俗性・呪術性のゆえ、研究対象から敬遠されてきた「術数」という分野が、本書では真摯な歴史的研究として取りくまれることにより、一つの堂々たる学問分野に引き上げられているといえよう。この点にはまことに頭のさがる思いがする。

読者は、本書を読みすすめていくうちに、「術」という言葉が放つやや雑音的で怪しげな響きもやがて合理的な和音と声に転化し、その結果、広く深い「知」の水源にたどりつけることになるだろう。

二

以下に、本書の構成を紹介し、各論の概要を簡略に示しておきたい。なお、編者の「総説」には、各論のポイントと注目すべき問題を中心に概要が纏められており、一般読者にも読みやすいように道案内をしてくれている。是非、参考にさせていただきたい。

三浦國雄 総説

加藤千恵 相い雑まじわること錦のごとし——「術」の五行
三鬼丈知 火極もまれば水に似る——『素問玄機原病式』

と運氣論医学

垣内智之 星の光を呑む——存思による昇仙

池平紀子 龍王の印もて万鬼を降伏す——道教と仏教の

法印

白井順 安産には地を借る——東アジアにおける出産

呪術

秋岡英行 術を以て術を伝う——陸西星『三蔵真詮』に

おける扶乩フイ

緒方賢一 孔子台湾に降臨せり——『儒門科範』を読む

宮崎順子 方位は幸せを運ぶ——神々のいる風水術

野崎充彦 風水マスターを通じてみる韓国風水の特質——

金料圭氏を中心に

加藤千恵「相い雜まじわること錦のごとし——「術」の五行」は、中国の伝統的自然哲学をささえる陰陽五行説、とりわけ五行説にかかわる諸理論を取りあげ、その觀念体系を探る論文である。相生説と相剋説で代表される五行説は、やがて干支暦に結びつき、三合説・干合説・休王説といった、五行と干支の配合による生・盛・死の循環原理の発見、それにもとづく十干十二支のカテゴリーズがなされるなど、より複合的なバリエーションを生み出してゆく、五行の展開相を明らかにし

ている。

三鬼文知「火極まれば水に似る——『素問玄機原病式』と運氣論医学」は、金代の医家劉完素の『素問玄機原病式』を取りあげ、五運六氣学説を検討し、医学における運氣論の自然観を明らかにしている。とりわけ運氣論の根幹を支える「亢害承制」の理論的分析は興味深い。それによれば、「五行間の単純な関係の平面を逸脱した気が過剰になって気を抑制して平衡を保とうとするはたらきは、運氣論では天地自然の構造の中に組み込まれているもの」と指摘され、五行の力学的関係が立体的・三次元的なものとしてとらえられていたことを明らかにしている。

垣内智之「星の光を呑む——存思による昇仙」は、道教の瞑想法「存思」について論じている。「存思」とは、対象を思いえがくことにより、対象のパワーを我が身に取りこむ瞑想法であるが、とくに著者が注目する問題は、「星の存思」における五星中心の世界観である。たとえば、両眼を日月に見立て、太陽には五帝（青・赤・白・黒・黄）が、月には五帝の夫人が宿ると考える「日月」の存思法、そして五星（歳星・熒惑星・鎮星・太白星・辰星）を五臓に見立て、身体に五星の精を宿す「五星」の存思法、さらに五星中心の世界観を下敷きとして形成された数種類の「北斗九星」の存思法という、

日月・五星・北斗九星の存想法に貫かれる五星中心の世界観を浮き彫りにしている。

池平紀子「龍王の印もて万鬼を降伏す——道教と仏教の法印」は、古くから呪術に用いられた印章、「法印」を取りあげる。法印は、道士が入山する際、魑魅魍魎の悪さを退治するために身につけていた印章であるが、『抱朴子』をはじめ、さまざまな道教・仏教文献から具体的な様子が見えてくる。著者は道教と仏教の両方面における法印の事例を精査し、素材や印面の文字、書体、文字数などの、法印に受け継がれる伝統的な特徴および思想的な意味について考察している。皇帝の玉璽や役人の官印など、本来、印章がもつ機能は持ち主のアイデンティティを保証するものであることに對し、宗教的な法印の場合、主として印面に刻まれる神格の名を借りることにより、神秘的な威力を仮に我が身にシンクロさせようとする行為であったという指摘は興味深い。

白井順「安産には地を借る——東アジアにおける出産呪術」は、東アジアで広くおこなわれていた出産呪術、なかでも胞衣信仰に密接な関連をもっている借地法を取りあげている。とくに著者が注目している問題は、呪術信仰そのものというよりも、産室の設置から胞衣の埋葬までの流れを俯瞰し、胞衣の扱い方に関する実態を明らかにするところにある。と

りわけ、著者は日本や中国との比較を通じ、東アジアにおける借地法の文献的流布を見通す壮大な考察をおこなっており、きわめて示唆に富む論考である。

秋岡英行「術を以て術を伝う——陸西星『三藏真詮』における扶乩^{フヂ}」は、明代の陸西星をリーダーとする扶乩の宗教サークルがどのような宗教活動をおこなっていたのか、術の伝授という観点からその実態を探る。陸西星らの宗教活動を記録した『三藏真詮』には、扶乩により降臨した法祖呂洞賓を筆頭に四七にのぼる神々が術や秘訣を授けていた様子が窺われる。天元（天与の丹藥）・地元（飢えた民を救済する丹藥）・人元（男女の性的修養による内丹）を中心に、風水・藥方に関する術が含まれているなど、伝授の実態が明らかにされている。

緒方賢一「孔子台湾に降臨せり——『儒門科範』を読む」は、扶乩の儒教バージョンというべく、道教の神ではなく、孔子・孟子の儒教神を降ろして交霊を行う、扶乩の儒教的展開を窺わせる内容である。『儒門科範』は、台南の儒宗神教の權威とされる楊明機が飛鸞^{ヒラン}（扶乩と同じ）儀礼を詳述したものであるが、その構成は天・地・人の三部によってなる。具体的には、孔子廟における位牌の配置図、祭礼・祭祀の式次第、祝文・祭文、天界への報告に用いる「疏文」、亡者の魂を救済して天界へ昇るためのパスポート（牒）を得るための「牒

文」、そして戒めの「銘」、神のお告げの「宝誥」、さらには儒・道・仏の偉人たちのコメント、靈魂を招く方法を記した「引魂科」など、飛鸞儀礼に関する詳細が収められている。著者は結論として、『儒門科範』は飛鸞儀式のための儒宗神教のマニュアルとして機能していたと指摘し、飛鸞儀礼の儒教的受容の実態を窺わせる論考である。

宮崎順子「方位は幸せを運ぶ——神々のいる風水術」は、風水の技法および歴史の変遷について詳しく紹介している。周代にはじまったとする風水は、一言で風水といっても、非常に多様な風水技法が考案されていた。唐代には一通り技法の枠組みが出そろい、たとえば、敦煌文献には避忌や魔除け、方角、式盤、地形、亀卜占、形勢、易占などによる、計十種の風水術が見られる。風水には二大流派が存在するとされ、一つは土地の形勢を観察し、良地を選択する形派と、もう一つは陰陽五行術によって方位の吉凶を判断する理気派である。著者は、これら形派と理気派のほかにも、神々の存在によって方位の吉凶を判定する、もう一つの風水術が存在していたと指摘し、今後の風水研究に新たな地平を開いている。

野崎充彦「風水マスターを通じてみる韓国風水の特質——金料圭氏を中心に」は、韓国における風水学の研究動向を紹介し、その特徴について論じている。著者は、韓国の風水史

について「王朝の交代や遷都論のような国家的・社会的に反響の大きい事業と密接に関わることが少なくない」と述べ、各時代には「指導的な役割を果たした風水思想のオピニオンリーダーたちが存在した」と指摘する。さらに著者は、実践性が強調される韓国風水学の伝統は、今もなお現代韓国社会にも息づいていると述べ、その注目すべき「風水マスター」として、金料圭と崔昌祚の両氏の風水学を詳しく紹介し、韓国風水学には理想主義的、かつ復古主義的な傾向が強くみられると指摘している。

(しん・ひょん 大阪大学)

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 人民中国雜誌社

1部400円／年間購読4800円(送料・税込)

7月号

人が中心の新型都市化

21世紀委員会長崎意見交換会
東アジアの秩序再構築を
歌に日中友好の願いを込めて

ほか

見本誌贈呈致します。

☎03-3937-0300／FAX03-3937-0955

デジタル版を Fujisan.co.jp で販売しています。試し読み(無料)がごさいます。

<http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385>